

九月感泣集

絵巻残闕

右下の片すみに一人の男が描かれている
白い杖をついて歩きはじめてゐる
彼方の山は深い緑

朱塗りの堂に近づく男
朱塗りの堂の扉は閉まつてゐる
朱塗りの堂の中に入りこまうとしてゐる男
朱塗りの堂の中に籠つて念じてゐる男
妄想の中には華やかな女の衣裳が
めくれあがつて煙のやうに堂の屋根から空に立ちのぼる

杖が一本白く横たわつてゐる
杖の側には緑の草と乱れて散りしく骨
山の上方に男の出発する様子がもう一度描かれてゐる

人に

木の葉が風にゆれてゐる
雨のしづくがつきつき落ちてゐる
風は吹いてはゐない
雨はふつてはゐない
本当はお前の心がいろいろに迷つてゐるのだ
お前のうれひを帯びた顔
それが僕には
風になり 雨になり

靴と帽子

靴は一足 帽子は二つ
どうして帽子が二つなの
好きな女が二人ゐるから

靴は一足 帽子は二つ
どうして帽子が二つなの

鮎は時々水を変へたがる

おくりもの

お前のくれたほたる石
僕は手でこなごなにした
かざしてみると
真晝なのに僕の指のあひだに 真昼
こまかい光の文字が見えた
スキヨ

お前のくれたブリキの金魚
僕は手でぺしやんこにした
耳もとに近づけると
混んだ電車の中なのに
かすれてやさしい声をした
アイシテル

追悼

1 田宮虎彦

田宮さんが身を投げたアパートを
僕はまだ確認してゐない
梅窓院の庭石に腰を下ろして
本堂の水煙を見上げてみると
青空に田宮さんの姿が見える
最も散文的な人と思つてゐた田宮さん
最も詩人らしくこの世を去つたといふ
詩人は死なないのだ
三十度の角度で空に身をうかべてゐる
少しどもつて語りかけてくる
肉体は重さうにそれでも空にうかんでゐる

2 富重義人

この夜ふけ
どんこは
松風の音を聞きながら
眠つてゐることであらう

石神井の池の鴨は
池に寄りながら
眠っていることであらう